

共同利用実施報告書(研究実績報告書)
(研究集会)1. 課題番号 2014-W-08

2. 研究集会名 (集会名の英訳もご記入ください)

和文: 室内実験と数値実験から探る地震活動の物理英文: Laboratory-experiment and numerical-simulation approach to physics of seismicity3. 研究代表者所属・氏名 海洋研究開発機構・堀高峰(地震研究所担当教員名) 波多野恭弘

4. 研究集会参加者の詳細 (研究代表者を含む。必要に応じ行を追加すること)

氏名	所属・職名	旅費支給の有無
直井 誠	京都大学大学院工学研究科・助教	有
加藤 愛太郎	名古屋大学大学院環境学研究科・准教授	有
阿部 純義	三重大学大学院工学研究科・教授	有
雷 興林	産業技術総合研究所・主任研究員	有
日野 英逸	筑波大学大学院システム情報工学研究科・准教授	有
山口 哲生	九州大学大学院工学研究院・准教授	有
岩田 貴樹	常盤大学コミュニティ振興学部・准教授	無
松川 宏	青山学院大学理工学部・教授	無
長尾 年恭	東海大学海洋研究所・教授	無
桑野 修	海洋研究開発機構・研究員	無
堀 高峰	海洋研究開発機構・主任研究員	無
中谷 正生	東京大学地震研・准教授	無
波多野 恭弘	東京大学地震研・准教授	無
光藤 哲也	東京大学地震研・ポスドク研究員	無
田中 宏樹	東京大学地震研・大学院生	無

5. 研究集会の概要 (200-400 字)

地震活動の特性を支配する物理過程を探るため、(1) 従来の地震学的知見からは説明が難しい現象は何かを観測データや実験データから探る、(2) 物理分野や統計数理分野の観点で地震活動を見直す、(3) 室内実験で見られる特性や数理モデルのアプローチを学ぶ、といった観点で講演をして頂き、それをきっかけとして議論を行った。阿部氏・加藤氏は(1)の観点で、火山活動やゆっくりすべりに関わる地震活動の特徴をそれぞれ紹介し、雷氏は室内実験、吉岡氏は統計力学的モデルを(3)の観点で紹介、日野氏は(2)の統計数理分野の観点で点過程データ解析の地震活動へのアプローチについて紹介した。

6. 延べ参加人数、研究集会の概要 (100 字程度) についてご記入ください (共同利用・共同研究拠点実施報告書に掲載します)

延べ参加人数 15名

地震活動の特性を支配する物理過程を探るため、(1) 従来の地震学的知見からは説明が難しい現象は何かを観測データや実験データから探る、(2) 物理分野や統計数理分野の観点で地震活動を見直す、(3) 室内実験で見られる特性や数理モデルのアプローチを学ぶといった観点で講演・議論した。

プログラム

- 10 : 00-10 : 30 堀高峰 (JAMSTEC) 「趣旨説明」
- 10 : 30-11 : 00 阿部純義 (三重大) 「An Aspect of Volcanic Seismicity」
- 11 : 00-12 : 00 加藤愛太郎 (名古屋大) 「Slow slip transients and large earthquakes」
- 12 : 00-13 : 00 昼食休憩
- 13 : 00-14 : 00 雷興林 (産総研)
「Insights on faulting nucleation gained from Laboratory acoustic emission study」
- 14 : 00-14 : 30 休憩
- 14 : 30-15 : 30 日野英逸 (筑波大) 「スパースモデリングに基づく点過程データ解析」
- 15 : 30-16 : 00 休憩
- 16 : 00-17 : 00 吉岡直樹 (東大) 「破壊現象の統計力学的モデルにおける微小クラックの統計性」
- 17 : 00-18 : 30 議論+結論